静岡県日中友好協議会ニュース

No. 111
2018. 7

世界農業文化遺産　中国初

稲と魚が共生、青田の伝統農法

浙江省麗水市青田県に残る伝統農法「青田稲魚」は、2005年６月、国際連合食糧農業機関（FAO）より、中国初の世界農業文化遺産として登録され、また中国農業部により「中国重要農業文化遺産」に認定されている。

600年にわたって続く、知恵と工夫を重ね、水田で養殖をしている魚が稲を突くと、稲についた害虫が田んぼの水面に落ち、それを魚がエサとして食べるといった、正に稲と魚の共生の農法であり、養殖が稲作の収穫量を、稲作が漁獲量を押し上げるという相乗効果がある。水田で養殖されている魚は「田魚」と呼ばれるコイの変種、黒、赤、黄、白の４種類の魚がいる。

【特集１】　～ 2018年度定期総会開催、新たなスタート ～

35周年の成果を礎に、40周年に向けて

5月24日㈭、ホテルセンチュリー静岡において、本協議会の2018年度の定期総会が開催されました。昨年度は静岡県・浙江省友好提携35周年に呼応して多種多彩な交流が行われたことが報告され、新年度はこの成果を基礎に、40周年に向けた交流を推進していく事業計画が承認され、新たなスタートを切りました。

◎川勝会長　挨拶要旨

【挨拶する川勝平太会長】

昨年は静岡県・浙江省の友好提携35周年の記念すべき１年で、上半期４月には梁黎明副省長を初め、146名の浙江省の友人が来静されました。記念式典では、程永華駐日大使からの祝辞をいただきましたが、その中で、静岡県と浙江省は数年前の日中摩擦に揺らぐことなく、地域間友好のモデルとなったことが取り上げられました。

下半期、秋には、中国在住者を含め、500名以上の静岡県民が浙江省を訪問し、記念式典では浙江省の車俊書記や袁家軍省長の両氏からご祝辞をいただき、共同宣言も発表される等、浙江省の静岡県に対する熱い思いを感じました。

習近平国家主席がまだ副主席だった時に一度来日され、その折、東京から九州まで新幹線で通過されましたが、実は習近平氏が浙江省書記だった時代に石川元知事と友情を深め、その縁で習近平氏が上海市書記だった頃に、静岡空港のために東方航空を選んで下さり、本来であれば、９年前の６月５日には静岡空港から降り立つ予定だったところを、中央政府に抜擢されてしまうという経緯がありました。次に習主席が来日される時には、是非とも静岡空港から入っていただきたいというのが、私の密かな願いであります。

静岡県日中友好協議会は、来年、設立40周年を迎えます。節目に向けて、また静岡県と浙江省が地域間友好のモデルであると誰の目から見ても認められるよう、この勢いを継続していきたいと思います。

事業計画　（2018年度）

１．人事文化交流事業：

①第37期中国研修生の受入れ（６ケ月間、人民政府外事弁公室他より４名）

②各界各層間の交流促進（青少年・女性・勤労者等の各層別交流）

③各友好訪中団の派遣及び各友好訪日団の受入れに対する協力　等

２．産業・経済・技術交流事業：

①静岡県・浙江省経済交流促進機構の取組み（第27回会議、シンポジウムの開催等）

②浙江省等技能実習生の受入れ（１年間又は３年間　15社前後、70名程度）

③専門別交流の促進、セミナー等の開催　等

３．情報交流事業：

①浙江省及び湖北省を始めとした中国便就航都市との連絡、調査、情報提供

②機関紙・情報ニュースの発行　等

【2018年度定期総会】

◎常勤役員・専務理事◎

総会・理事会で常勤役員・専務理事が選任されました。

新任：安間直道　　退任：外山敬三

【特集２】　～ 2018浙江民間工芸美術展示会が静岡で開催 ～

浙江が誇る工芸作品、来場者を魅了

このほど、６月15日㈮～６月17日㈰の３日間にわたって、ツインメッセ静岡において、浙江省の「巧」（たくみ）を紹介する「2018浙江省伝統工芸品展示会」が行われました。

【浙江省の著名職人が静岡に勢ぞろい】

静岡県と浙江省の友好提携35周年の記念事業の一環として、昨年11月に杭州市で開催された「2017静岡県伝統手工芸品展」がこの展示会開催のきっかけとなり、今回、浙江省の民間工芸美術品が静岡県で展示されることになりました。

昨年の展示会では、本県のひな人形・漆器・陶器・金細工・染織・古美術等、静岡の伝統工芸品約400点が展示され、また茶道の実演も行われ、成功裏に幕を閉じました。

開幕式では、主催者側として、静岡県日中友好協議会の栗原績理事長は来静団一行を歓迎すると共に「現地の伝統工芸の素晴らしさを多くの人に堪能してもらいたい」と期待の意を表し、これに対して、浙江省人民対外友好協会の鄭竹筠副秘書長は浙江省側を代表して「浙江省には才能あふれる工芸品を創作する職人が多い。工芸品が平和の使者になり、両県省の交流と友好が深まる機会になれば、大変うれしい」と挨拶しました。

静岡県日中友好協議会、浙江省文化芸術界連合会、浙江省人民対外友好協会の共同主催、浙江省民間文芸家協会、日中民間工芸家友好促進会㈱の共同運営による今回の展示会には、地域的な龍泉の青磁、台州の刺繍、長興の紫砂茶器、蕭山のレース、素材を活かした紙細工、剪紙、竹の根彫刻、竹の彫刻、クルミの彫刻、ツゲの彫刻、毛髪の刺繍、石材の彫刻等が展示（一部実演）され、浙江省が民間工芸の宝庫であることを知る機会となり、またその緻密で手が込んだ作品の数々に、来場者は息を飲んで見入っていました。

今年の秋には、再び浙江省で静岡の工芸品を含む伝統工芸品展が企画・計画されており、民間伝統工芸品をキーワードに交流の輪が更に深化していくことが期待されます。

【来場者に精巧な作品を紹介・剪紙(左)、竹の根彫刻(右)】

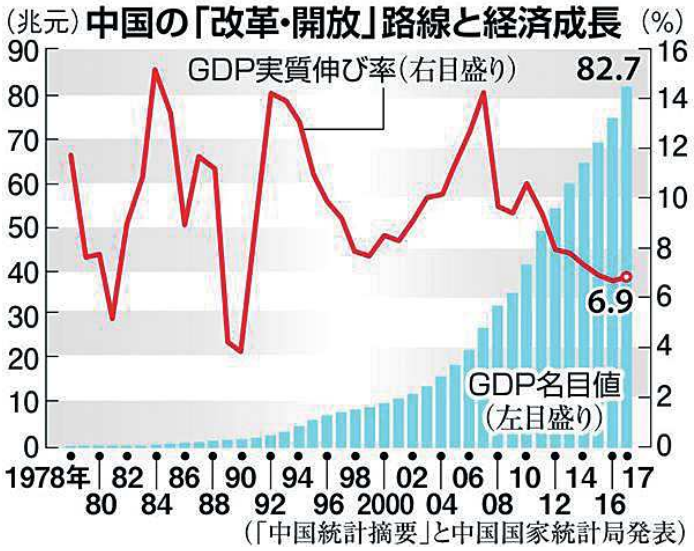
シリーズ　クローズアップチャイナ

改革開放40年、『今』・『昔』

中国経済、40年で200倍に

今年は、中国が「改革・開放」路線を打ち出して40年が経過します。1978年12月、共産党第11期中央委員会第３回全会（３中全会）で、経済成長こそ最重要だとする新たな政策に大きく舵を切りました。

1978年当時、中国の国内総生産（ＧＤＰ）は3,679億元（現在のレートで約６兆3,300億円）。それが2017年は82兆7,122億元と約225倍に膨らみました。輸出額では1978年の98億ドル（同１兆650億円）が、2017年には２兆2,635億ドルと約230倍になりました。為替レートや物価変動で単純比較はできないが、40年近くで経済規模が200倍前後の変化を遂げたことが感覚的に理解できます。



(「中国統計摘要」と中国国家統計局発表)

浙江経済、40年で330倍に

1978年当時、浙江省の域内総生産（ＧＤＰ）は157億元（現在のレートで約2,700億円）、中国全体の4.2%を占めていました。それが2017年は５兆1,768億元と約330倍となり、中国全体では6.2%に上がりました。一人当たり平均のＧＤＰでも1979年の331元から2017年は91,551元へと、277倍となりました。今日の浙江は、改革開放政策の最大の恩恵を受けた省となっています。

‖ 静岡県日中友好協議会が誕生 ‖

改革開放の前年1978年、鄧小平副首相が来日し、日中友好フィーバーが起き、日中平和友好条約も結ばれ、静岡県でも中国とこれから独自で交流を考えなければならないという新たな機運が一気に高まりました。翌1979年、県内の各界各層のトップが発起人になって、「思想信条は問わず、官民一体となって、思想信条を超えて日中交流の一遍で組織を作りましょう」と呼びかけて誕生したのが『静岡県日中友好協議会』です。

‖ 日中経済交流シンポジウムを開催 ‖

誕生したばかりの静岡県日中友好協議会は、翌1980年、これから日本との経済交流が進むことを念頭に置いて、中国が改革開放政策を具体的にどうやっているのかといった視点から、中国の代表団（現・中国商務部国際貿易経済合作研究院）を静岡県に招いて、「日中経済交流シンポジウム」を開催し、日中初のシンポイベントとして話題を呼びました。

中国最前線：今日のキーワード

シルクロード経済圏構想「一帯一路」

「今世紀の偉大なプロジェクトになるかもしれないし、価値のないものとなるかもしれない。だが、何であれ、部外者ではいられない」

今年４月、香港で開催された「一帯一路会議」のある出席者のコメント

「一帯一路」構想は、海と陸の２つのルートから、アジアから欧州までを結ぶ大胆かつ巨大なプロジェクトです。世界人口の65％、世界経済の約40％を占める少なくとも70ヶ国に及び、数多くのインフラ・エネルギー計画を効果的に進め、こうした計画に必要な原材料を供給する炭鉱や石油・ガス田の開発も重要な位置を占めています。第２次世界大戦後の欧州を復興するため米国が推進したマーシャルプランに例えて、中国版「マーシャルプラン」と見る一方、開発途上国で展開する「新植民地主義」、中国周辺地域で構築が企図される「新時代の朝貢システム」といった見方があります。中国が発展すれば日本も発展し、日本が発展すれば中国も発展するのが日中関係であり、日本にとっては、この「一帯一路」と自由貿易体制と連携していくならば、日本にも大きな恩恵があります。

浙江省の一帯一路　（陸路の義烏と海路の寧波）

浙江省には、陸路では欧州と結ぶ「義新欧」の義烏があり、海路では「寧波－舟山港」の港湾があり、正にゲートウェイがあります。

海上シルクロードの玄関口である寧波－舟山港は、2017年に一帯一路建設総合試験区の認定を獲得し、同年のコンテナ取扱量は世界第４位、貨物取扱量は10億トンを突破しました。今では、古代海上シルクロードの出発港の一つである寧波－舟山港は、21世紀海上シルクロードの国際ハブ港となり、世界の600以上の港湾と繋がり、242本の航路を開いています。2016年の寧波と一帯一路沿線国・地域との年間貿易額は248億ドルに達し、2017年１月から10月まで寧波の一帯一路沿線国への輸出額が1044.6億元、前年同期比15.0％増、その内、中東欧諸国への輸出額は、141.8億元、前年同期比22.7％増に達しています。

一方、陸路の「義新欧」列車の出発・到着駅の義烏には、世界最大の日用雑貨卸売市場があり、世界中のバイヤーが多く訪れ、日本でもお馴染の100円ショップ等の商品の多くはここから出荷されています。「義新欧」列車の目的地であるスペインのマドリードは、欧州の日用品の集散地と言われています。「義新欧」列車が運行することで、双方の商品・貨物の輸出入コストが下がり、輸送効率が高まり、浙江省や中国の商品がよりスムーズに海外展開できることや世界の商品を浙江省に集めることができるメリットがあります。2016年の義烏の輸出入貿易額が2229.46億元に達し、一帯一路の沿線国への輸出額が159.5億元、同年期比6.2％増加し、輸出総額の51.9％を占めています。

浙江人物紀行

孔子の末裔　孔祥楷

儒教の創始者である孔子（BC551～479）は、春秋戦国時代の末期に活躍した著名な思想家であり、教育家として広く知られています。

孔子は仁・義・礼・智・信を提唱し、弟子を連れて全国を周遊し、晩年には六経という６種の経書からなる儒学の基本経典を著しました。後に弟子たちによって孔子の語録や思想が「論語」に編纂されました。

【孔子75代直系子孫　孔祥楷】

孔子、衢州に縁

山東省の曲阜市には有名な孔子廟があります。しかし、実は孔子の家系は途中から北派（山東省曲阜市）と南派（浙江省衢州市）に分かれ、衢州市にも孔子廟があります。

1128年、金が大挙して南方に進駐し、宋の皇帝・趙構が南に逃げた際に、孔子48代目の直系子孫である孔端友が皇帝の世話役としてお供した功績が認められ、南宋が成立した際に衢州に家を与えられ、定住し始めました。その後、元、金、宋が入り乱れ、正統な孔子の直系子孫に与えられる「衍聖公」の爵位が同時に３名の子孫に与えられた時期もありましたが、元の初代皇帝フビライが中国を統一した際に、孔子の家系を精査し、52代の直系孔洙を「衍聖公」として北京に招こうとしましたが、孔洙は衢州ですでに５代続いている南派として孔子の墓を守る必要があるとの理由で、この爵位を北派の子孫に譲ったというエピソードがあります。

【儒学の創始者　---　孔子】

孔子75代、直系子孫/孔祥楷

現在、衢州の南孔子廟を守る75代目の直系子孫/孔祥楷は、子供時代は自身の身分をほとんど明かさず、青年期は西安建築工程学院を卒業し、河北省唐山にある金鉱場に26年勤め、一般の技術員から金鉱場のトップになり、二千名の職員を率いました。60歳の時に瀋陽の黄金学院の副院長として抜擢され、その後、50年余離れていた衢州に戻り、市長の助役を務めながら、儒教文化や孔子の思想を広めることにより、知名度の低かった衢州市の発展に力を注いでいます。

衢州市の南孔子廟でとりおこなわれる孔子の生誕記念祭は中央電視台に何度も紹介され、2011年には国家無形文化財に指定されました。この80歳近い穏やかな老人は「老爺子（おじいさん）」の愛称で市民から親しまれています。

【浙江省衢州市にある南派孔子廟】

今時の中国の学生

日本に興味津々、私の学生たち

寧波大学外国語学院外籍教師
（静岡県日中友好協議会　交流推進員）
横　井　香　織

先日、ある女子学生が私に尋ねました。
「先生、７月に日本へ行くんですけど、東京の大きな書店を紹介してください。」「７月に花火大会をやっているところ、ありますか。」

ここは、寧波大学外国語学院日本語学科です。各学年60名の学生が、日本語や日本文化を学んでいます。大学生にとって、６月末の期末試験、７月初旬の日本語検定を終えると、待っているのは約２か月の夏季休暇。この休みを利用して、日本へ旅行する学生もいるのです。

日本語を学ぶきっかけはアニメ、アイドル、お笑い、ドラマ、村上春樹、東野圭吾等、人それぞれです。学生たちは、２年半の間、じっくり日本語を習得し、毎年25名前後の学生が３年後期（３月）から日本の大学へ１年間留学します。北は岩手大学から西は広島大学まで、協定校に留学した学生たちは、授業で学ぶだけでなく、サークルや生活を通して日本を肌で感じ、日本を満喫します。

一方、寧波でも忙しい授業の合間に、日本語のサークル活動が行われています。それは隔週月曜日の夕方から始まる３大学合同のサークル、「日本語角」（日本語コーナー）です。寧波大学、工程学院、科学技術学院で日本語を専攻する学生たちが、もちまわりで約２時間のアクティビティを企画、運営しています。毎回、日本語、日本文化に関わる発表、ゲーム、自由交流の３本立てです。中でも楽しみなのは自由交流でしょう。大学や学年の枠を超え、留学生や日本人教師も参加して、日本語でおしゃべりする時間です。そして最後は恒例の記念撮影。

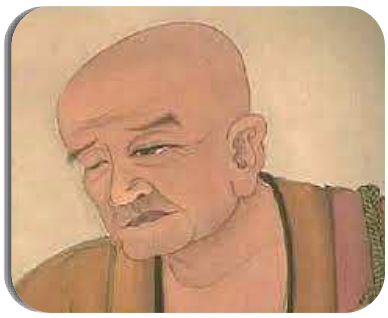
４年生になると、学生は卒業論文に取り組みます。「森鴎外の作品における女性観」や「川端康成『雪国』の翻訳の比較研究」、「日本の焼き物文化」、「伝統芸能としての相撲」等様々なテーマで研究し、日本語で執筆します。５月の卒論口頭試問に合格すると、６月に晴れて卒業です。こうして日本通、親日家の若者が、毎年、ここ寧波市内だけで何百人も巣立っていきます。

【日本語コーナーをしめくくる記念撮影】

【真剣に学ぶビジネスクラスの学生達】

プロフィール：横井香織さん
学歴：静岡大学人文学部卒業、兵庫教育大学大学院博士課程修了、博士（学術）
職歴：静岡市内の公立中学校、県立高等学校に30数年間勤務
2016年に中国へ渡り、中国海洋大学を経て、現在、寧波大学外国語学院外籍教師

歴史の街道
--源 遠 流 長


【円爾（聖一国師）】

静岡茶の始祖・聖一国師の辿った途

静岡市の山間部・栃沢に生まれる

静岡茶の始祖として知られる聖一国師（圓爾弁円）は、1202年、静岡市葵区栃沢に生まれ、5歳の時に久能寺（今の久能山）の堯弁法師に師事し、天台宗を学びました。

日本と中国の著名な寺で修行を積む

奈良・東大寺、鎌倉・寿福寺

幼い頃から仏門に優れた才能を示した圓爾は、奈良の東大寺で受戒し、更に鎌倉の寿福寺で行勇に師事して臨済禅を学び、28歳で一切経（大蔵経）を読破しました。

杭州・径山寺等

33歳の時、宋に渡航し、寧波の景福律寺、天童寺、阿育王山、杭州の浄慈寺、霊隠寺を経て、杭州の径山寺で人生最大の師匠となる無準師範に師事しました。

聖一国師が伝えたもの

6年にわたる中国での厳しい修行を経て、1241年に39歳で帰国し、京都の東福寺を開山しました。中国からは生活と密接な関わりを持つ茶の栽培や茶道、織物や丸薬の製法、蕎麦の栽培法、豆腐や醤油の製法等も日本へ持ち帰り、特に径山寺からはお茶の種を持ち帰り、静岡市葵区足久保にも植えられ、静岡茶の発祥であることで知られています。78歳で生涯をとじ、その後、聖一国師の諡号を受けました。

【聖一国師顕彰会】

聖一国師の功績を広めるために、2016年11月に聖一国師顕彰会が発足しています。昨年の5月には京都の東福寺で「聖一国師祭り」が行われ、聖一国師にゆかりのある三市（静岡、京都、福岡）の関係者が出席しました。同7月には聖一国師の生家で「水汲みの儀」が行われ、ここで汲まれた水が博多祇園山笠に送られ、当時、清めの水により博多一帯の疫病を救った聖一国師を偲びました。また、同11月には、聖一国師顕彰会のメンバーが杭州の径山寺を視察し、県と省をつなぐ茶の歴史に触れました。今年は7月7日に聖一国師生家で水汲みの儀が、11月には博多でシンポジウムや交流会が行われる予定です。

【静岡市栃沢にある聖一国師の生家】

発行所：静岡県日中友好協議会
発行人：栗　原　　績
静岡市葵区追手町44－1（静岡県産業経済会館1F）
TEL（054）255－8111